

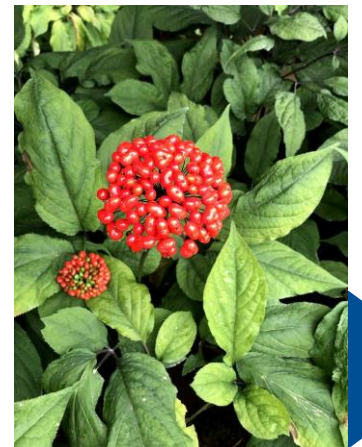
信州人蔘産地の取組み

【本日の内容】

- ・人蔘の歴史
- ・国内産地について
- ・信州人蔘センター改革
- ・今後の課題



発表者：西藤 敏幸
発表日：2022年10月5日



人蔘の歴史

- 徳川吉宗(8代将軍)の政策で日本各地で生産を開始
- 175年前(弘化3年)に、福島・島根と違い長野は日光から29粒の種を譲って貰い植付を開始する
- 気候・土壌等の問題もあり、現在は、島根県(松江市)、福島県(会津若松市)、長野県が主産地として発展を遂げる

国内産地について

【長野の主な生産地】

- 佐久市、立科町、上田市
- 生産者数：16農家
- 平均年齢：72歳
- 最年少41歳 最高齢87歳
- 生産数量：約5トン（6年生人蔘）
* 令和3年度実績
- 人蔘収穫迄7年（土造り1年含む）

【その他の産地】

- ・福島県会津若松市
- ・島根県松江市
- ・茨城県つくば市



信州人蔘センター改革

- 農家から預かった生人蔘の加工・販売は、JA佐久浅間農協下部団体の信州人蔘センターで運営を行っています。
- 生産量の低下に伴い信州人蔘センター及び佐久浅間農協の維持費を支えるのが困難となる。
- 佐久浅間農協及び農家代表と1年半協議を重ね、2022年7月1日 生産者16名全員の賛同得て、佐久浅間農協から切り離れた別会社の設立に踏み切る(生産者主導の会社)

今後の課題

- 新規就農者の育成→生産面積・生産量増
- 栽培方法の検討→個々の栽培面積拡大
- 小屋の改良→杭・藁・葦の確保が困難な為、効率的な小屋造り
- 人蔘加工（紅蔘・白蔘）の検討→差別化・ブランド化
- 2次製品の販売先検討→エキス・飴等の拡販
- 新製品の検討→販売増に繋がる製品

課題の中にはメリット、デメリットがあるので更に検討は必要

新規就農者が増えないと信州人蔘の未来はない！